

## ◆ 第十六話 三日月の池

(昭和30年10月1日掲載)



嵯峨天皇の弘仁年間勝宮守(すぐりみやもり)は不図した事からざんに会い、天皇の不興を蒙って、擬大領として下毛郡に左遷されたのであった。

最愛の妻と別れ、単身赴任したので勝宮守の心は懊々(おうおう)にして楽しまないものがあった。

都皇子の生活に比べて多志田の蕨野の生活は、寂れうと孤独に耐えられないのは無理もないのである。

その勝宮守の慰めは三日月の池を眺める事である。竹木蒼然たる中に新月形をなす池の情景は、風流典雅であった。そこで往年の華やかな生活を思い出すのである。

勝宮守はしょう(笙)の名人であって、子刀自売(ことじめ)は琴に堪能であった。観月の宴で、天皇の御感を賜った、しょうと琴の合奏を思い出すのである。衆人環視の中で、先輩を斥(しりぞ)けての天皇の御寵愛であるのみでなく、絶世の美姫、子刀自売との輝かしい将来を嘱望され、勝宮守二十一才子刀自売十五才の春、君命により華燭の典を挙げたのである。それからの栄達は世人の羨望を集め、三四年の幸福は夢の如く過ぎた。その得意の時代に不幸の兆しは隠されていたと云うのは、世人の嫉とは加わり、同僚のきけいによって、今回の憂き目を見たのである。

然し勝宮守は天皇を決して恨みに思わなかった。そして三日月の池のほとりにみそぎして、君が千年を神に祈らんと云う歌を作り、日夜精進潔斎を怠らなかったのである。そればかりでなく都を去るに及んで天皇より頂いた冠を時々取り出して、聖代の昔を偲んだのであった。

一方、子刀自売は最愛の夫と息別れたばかりでなく、天皇の庇護も無くなり、生活も窮迫し、幾多の誘惑の魔の手が伸びたが、貞節な彼女は頑として否定したのであったが、遂に宮中に暇を賜り加茂の流れの片ほとりに庵を結び怨晴れて勝宮守の宮中への復帰の望みもなくなり、遂に都

落ちを決心して二三の家来と共に九州路へと旅立ったのであった。

どこをどう通ったかと思う事は何らないが、兎に角、片時も忘れる事が出来なかった勝宮守の所へ姿を現した事は事実である。長年苦しみを耐えて久し振りに昔の君の懐に抱かれた、子刀自売の喜びは如何ばかりであったろう。

黄金作りの雌雄二つの神殿が埋められていると言われる三日月の池に、仲睦まじきおしどりの姿を映して慰め合い楽しみ合ったのである。子刀自売はこの環境を、

松枝の緑にやどるつたの葉の 錦を洗らふ三日月の池

と詠じている。

下毛郡擬大領蕨野勝宮守は難波部首子刀自売の内助の功を得て、善政を敷いたのである。久福寺を開基して善男善女の崇拝を集めたりした。それから、不図した風邪が基で病床に伏し、村人の病氣平癒の祈願もその甲斐なく天長元年三月十七日四十四才を以って死寂したのであったが、その病氣看護の子刀自売の甲斐甲斐しさは驚くばかりであった。

それからの独り空屋を守る十年間、生前夫の用いた狩衣を朝に衣桁に掛け、それを生ける人に仕ふるように始末したし、生前の容貌を丹精込めて木像に作りて神棚に置いて、生前の如く言葉を掛けたのであった。子刀自売は四十八才を以て歿したのであるが、生前好んで登った山を、天晴れ節婦の名を讃えて、賢女が岳といい、久福寺に夫婦を祭った霊びょう有り、遺品のヤジリ、鏡などは現存していると云う事である。(完)